



そこで一句

五七五の十七音、世界一短い詩の出来栄で、才能のありなし、昇級を競って一喜一憂：隠れテレビっ子の私が、ついついチャンネルを止めてしまう番組。

いつもなら、テレビ画面を通して、大衆が求める姿を「演じる」芸能人たちが、結構本気で挑んで作り上げた一句。そこから立ち昇る作者の「美意識」という素の一面を覗き見る面白さ。

それもさることながら、彼らの作品に批評を加える俳人、夏井いつき氏のちよつと辛辣で、明快で、歯切れの良いコメントが、何と言っても一番の魅力。それぞれの句の「手直し」をして、それを見事に蘇らせた瞬間に、私は鳥肌がたつような感動を覚えるのです。

彼女の「手直し」を見ていて、だんだんと気づいたことがあります。それは、句の作者のコメントを手がかりに、時には問い返ししながら、その真意を読み取るうとする姿。



作者が感じていること、言いたいことを、もつと的確に伝える言葉や表現を、丹念かつ厳密に見つけ出し、ていこうとするのです。例えば作者の感動そのものが、少しもの足りないものであっても、決してそこには手を加えず、あくまで、本人の心情を映す言葉を探す夏井氏。

そして最後は、「でも、俳句ではよく描かれるありがちな視点」とピシヤリ。詠まれた作者の思いに、最大限の敬意を払いつつも、そもその感性自体には「あなたらしさ」をとことん求めていく：そんな「手直し」なのです。

別のものに変えたり、何かを加えたりするのではなくて、きつとあるはずのものを「引き出そう」とすること：「直す」ことの理想形をそこに感じます。

たった2〜3文字の直しによつて、それが別の思いに変わるのではなく、作者の思いの本質が、より鮮明に目の前に立なのです。そして次に、その時々思いが「聞き取られていく」のです。

先日、夏井氏の人気を探るべく、密着番組も放映されていました。その中には、彼女を通じて俳句の魅力を知って、句を詠むようになった人たちのインタビューも盛り込まれていました。

「どんなに辛い経験も、句の中でなら生かされる。必死に、忘れようとしなくてもいいんだ。」  
俳句との出会いに救われたという、そんな言葉が印象に残りました。

思いを聞き取られる場所こそが、力をくれる：嬉しい時も、悲しい時も：大人でも、子どもでも。

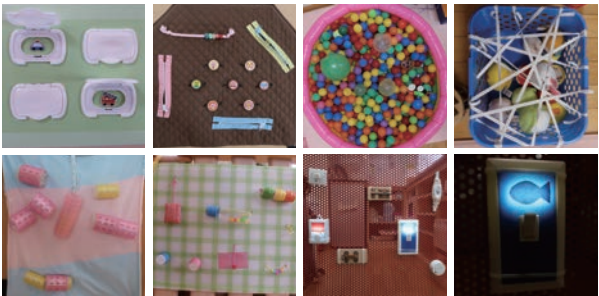
園長 折井誠司

ち上がってくる…その瞬間、作者の心情がこちらにもぐつと滑り込んでくる…それがあの感動なのだと思うのです。

さて、暖冬とはいえ、冬ど真ん中の1月のある日、2階を覗くと、子どもも、そして保育者も体調不良でダウン…そのため、ちようどクラス全体が半数となったおひさまぐみ(0歳児クラス)。

そのせいか、いつもよりひっそりと感じる部屋にある、工夫された遊具の数々は実に饒舌。そして、子ども一人一人、全員の動きを追うことができるこんな日も、悪くないなどと思う私。(お休みした皆さん、ごめんさい。)

他の子の遊びをじっと見つめる、目についた三輪車にまたがる、おもむろにハンドルを持ち上げて方向を変える、シャボン玉に手を伸ばす、見よう見まねで、息を吹きかけてみる、事務作業を片付ける保育者を傍



で待つ、食事が目に入り駆け寄る…。時に微動だにすることなく、大きく表情を変えることもなく、多くを語らぬ彼らは、さながら哲学者。それぞれの振舞いの前に「何を思つてか…」という言葉を置きたくなるのだけれど、頭の中では、グルグルと思考を巡らす彼らなのです。

だからなのでしょうが、「もう少しやりたい?」「鼻をかむね」「鏡で見てごらん」「明日、それやろうね」

こうした一見当たり前に感じる担任たちの問いかけは、実は丁寧な「意思確認」であることに改めて気づかされるのです。

自分が今置かれている状況を知り、やがて自分にかかるだろう事が伝えられ、自分の意思が聞き取られていく：周辺世界に対する情報收拾能力がまだまだ未熟であるからこそ、それをまづ「知る(知らされる)」ことが、彼らの大事な権利

●編集 誠美保育園  
●発行人 折井誠司  
●印刷所 誠美保育園  
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会  
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
電話 042-675-1551  
ファックス 042-677-5643  
E-mail: sebi@nokken.jp  
http://nokken.jp/